天神講を再開した 奈良弥一郎さん

（十二所町・75歳）

むかし、十二所の寺小屋には天神様が祭られていました。この寺小屋では年に一回天神講という行事が行われていました。天神講は、八歳の少年から十八歳前後の青年まで十人ぐらいがグループとなり、当番となった家庭へ各自ふとんを持参し、一夜をともにし、翌朝、日の出とともに神社に参拝し、学業の向上を祈願したものです。

しかし、この天神講が戦後すたれていましたが、奈良弥一郎さんが公民館長となってから「むかしのよき行事を」とのことから昭和五十二年に復活させました。毎年六月公民館へ泊まりこみ、上級生が下級生のめんどうを見て習字やゲームなどふだん各家庭では体験できないことをしています。奈良さんは、「できることなら十二所全体の天神講でなく各町内ごとに実施を望みます。よい意味での〝ガキ大将〟を中心とした活動で〝いじめ〟などという問題も少なくなり、子供会本来の活動につながるのではないでしょうか。」と話していました。

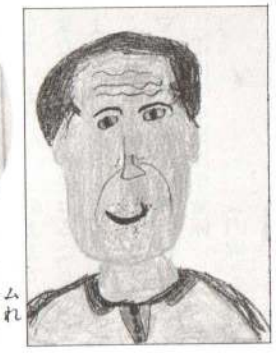
▲習字を指導する奈良さん

ちびっこギャラリー

十二所保育園

はが　せいこちゃん
いっしょに寝てくれるやさしいおばあちゃん。

ささきりょうくん
おじいちゃんはゲームをいっぱい買ってくれる。



たむらゆみちゃん
おかあさんの作るごはんはおいしいよ。

ミニ・ガイド

▽北鹿ハリストス正教会
曲田福音聖堂

明治二十五年、熱心なハリストス教の信者であった曲田の畠山市之助氏が私財を投じて建てた聖堂です。この聖堂を見学されたい方は教委社会教育課（内線255）か畠山勇太郎さん（☎52～3606）に事前に申し込みください。

▽道目木更生園

精神薄弱者更生施設、昭和四十九年十二月開設。

▽道目木スキー場

同スキー場は、道目木地区の奥に位置し、ボーラスターリフトが設置されています。

▽老犬神社

葛原地区にあり、マタギである主人を助けた老犬シロを祭っています。

褌（ふんどし）と下駄（げた）を奉納する三哲（さんてつ）神社

三哲神社には千葉秀胤（ひでたね）が祭られている。秀胤は、一戸（岩手県）の生まれといわれ、幼少から賢い子で、青年期に江戸に出て武芸・医術・文学を学び、一人前の医者となって三哲・玄秀（げんしゅう）と号したため、人々から三哲様と呼ばれた。

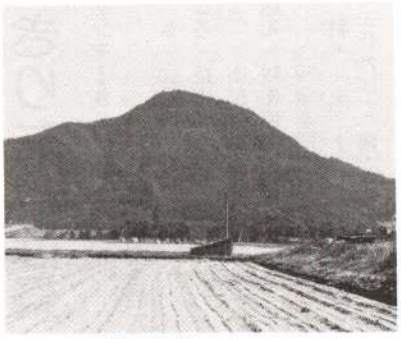
三哲は、寛文五年（一六六五）に大湯に来て、翌年十二所に移り医を開業するかたわら武芸も教授した。あるとき国老梅津半左衛門が十二所に来て治療を求め、その才を藩主に伝えた。藩主は三哲を召し出して弓矢の術をためし、その見事さに感動し二百石で召しかかえようとしたが従わなかった。大工の術を学びに来た武田三益の祖に、大工は年老いると役に立たないからと医学を教授した。武田家が以来医家として十二所で続いた基であるという。

十二所城代塩谷民部重綱（ふかしげつな）が重病のとき、三哲の治療を受けて全快したが、約束の謝礼米を払わなかったので、三哲は年貢米を取り押えて貧民に分けあたえてしまった。また、町の富豪佐藤儀右衛門は欲が深く、妻の難産を治療してもらったのに約束通り代金を払わなかったので、三哲は儀右衛門の運送米を取り押えて人々に分け与えた。こういう豪気反骨の三哲をけむたがる人々は、捕手を差し向ける機会をねらっていた。旧六月十五日、十二所の病家から薬代のお礼として酒と肴を贈って、だまし討ちにしようと計画を立てた。計画とは知らない三哲は、大いに酔って大滝神社前の浴場に入っているとき、三人の腕ききの武士に押えられた。

十二所に運ばれる途中、捕手の一人福助に水を求めながら「蝦夷（えぞ）ヶ森の前山に葬ってくれ。三年のうちに祭らなければ十二所の町を焼く。自分は日ごろ恩にも報いるし、仇にも報いる。もし自分の言う通りであったら霊があるものとして祭れ」といったという。三哲は官の取り調べに一切抗弁せず、六月十七日刑についた。町民、特に上新町の住民が願い出て、遺言通り蝦夷ヶ森に葬り、数年後に神社を建立した。それから蝦夷ヶ森を三哲山、社を三哲神社と呼ぶようになった。

三哲神社には、よく褌（ふんどし）と下駄が奉納されているが、それは、足駄（あしだ）を鳴して大滝へかよった三哲への住民の思慕であり、不意討ちのとき褌さえつけていればという住民の同情の現われであるという。

（大館市史第四巻から）


▲三哲山遠景

◆次回は「有浦地区」編をお送りします。